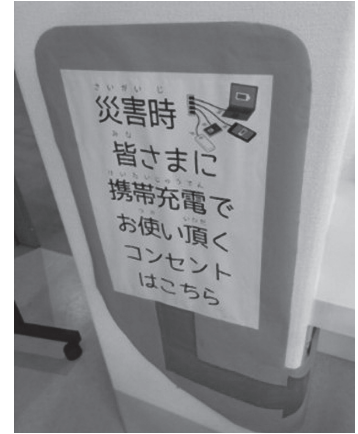


2



ザザビー・ドゥ屋上で市民発電所完成を喜び利用者と市民の皆さん



非常時に迷わず使えるように、使用できるコンセントの位置を掲示

最大の特徴は「市民発電所」 としての運営

上記を背景に、同団体ではこれまで、千葉県松戸市に2ヶ所、同柏市に2ヶ所の福祉施設に太陽光発電を設置してきた。その最大の特徴は「市民発電所」として運営していることである。一般に、コミュニティや市民により再生可能エネルギーへの出資を受けたエネルギー生産者が「市民発電所」と呼ばれるが、同団体では、①資金調達に市民が参加する ②（可能ならば）施工に市民が参加する ③停電時には近隣の充電ステーションとなることを「市民発電所」の条件としている。

例えば、社会福祉法人彩会が運営する生活介護事業所ザザビー・ドゥに、2022年に設置した「柏そらびか発電所第1号」では、地域住民が「パネルオーナー」として参加をしている。銀座環境会議が太陽光発電パネルをパネルオーナーに販売し、オーナーからパネルを借りて発電事業を行うというスキームである。結果として、クラウドファンディングでは77名の市民が参加し、40枚すべてのパネルにオーナーが付いた。また、施工はもちろん専門業者が行

うが、釘打ちなど子どもでも出来る作業に市民が参加する機会を作った。そして設置後は、平時に施設としての自家消費を超える余剰分を電力会社に売電し、災害等の停電時には充電ステーションとして地域に開くことにしている。

福祉施設側の目線

これら市民発電所の取組を、福祉施設側はどのようにとらえているだろうか。社会福祉法人彩会ザザビー・ドゥ所長の川名早苗氏にお伺いした。施設の移転を検討していた時、かつてたびたび水害に見舞われた経験から防災については強く意識していたこと、地域に開かれた施設を作りたいと考えていたことなどから、太陽光発電設備は是非設置したいと考えていた。一方、初期投資の壁も高く悩んでいたところ、「銀座環境会議が松戸市の教会に市民発電所を設置した」という新聞記事を読み、「自己資金ゼロ、充電ステーションとして市民に開放」という言葉に強く惹かれ、翌朝には平野氏に連絡していた。そこから、前述の「柏そらびか発電所第1号」設置に動き出した。「何

かがあった時に、地域の皆さんに還元できる施設になれるということで、障害者施設という機能を超えて地域の皆さんが足を運んでくれる施設になりたい」と川名氏は話す。

その後、市民発電所は、グループホームや自立支援ホームなど他の施設へも広がりを見せている。銀座環境会議では、補助金の活用や企業の寄付キャンペーンを組み合わせた資金調達、施設の特性に応じた蓄電池の設置など、現場のニーズに対応したスキームづくりをサポートしている。平野氏には印象に残っている場面がある。自立援助ホームで暮らす子どもたちは親と一緒に住むことが出来ない複雑な事情を持つ場合が多く、例えば取材が来てもあまり出たがらない傾向がある。しかし、「柏そらびか発電所第2号」について取材された際、写真を撮ってもよいと言ってきて、施設の方も驚いていた。この設置には、寄付を通じて、全国のたくさんの方が自分たちのことを気にかけてくれている、協力してくれたんだということを、子どもたちも感じているからではないだろうか。